## 体験型海外教育実地研究　第４学年　異文化理解

## 「Let's study kanji !」

教育学研究科　学習科学専攻　カリキュラム開発専修　吉　川　修　史

### １　はじめに

「教育とは何か？」と自分自身に問いかけると頭に浮かぶのは，自分が経験した教育であり，テレビアニメに映し出される教室の風景であり，文献を読む中で捉えたイメージとしての教育である。無意識のうちに“日本における”という枠組みの中で教育を捉えてしまっている自分に気づかされる。これは，教育に限らず様々な事象に向き合う際に言えることである。今日，世界ではグローバル化がますます進展し，あらゆる場面で「世界」に触れる機会がある。しかし，日常で触れるそれら「世界」的なものは，断片的であり，場合によっては日本人の価値観に寄り添ったものとなっている。この体験型海外教育実地研究においては，なによりも「体験」という言葉が魅力的であった。実際にアメリカにおける教育や文化を見て，聞いて，知って，感じて，考える中で自分自身の視野を少しでも広げたい，という思いから参加を決めた。

### ２　実地研究の日程と概要

| 月日 | 曜 | 交通等 | 訪問地・用務等 | 宿泊地 |
|---|---|---|---|---|
| 4/24 | 水 | 渡航までの日程，パスポート，ESTA，授業研究テーマ事例，　部屋割り | | |
| 5/15 | 水 | 授業研究テーマ案の交流・テーマの設定 | | |
| 6/ 6 | 木 | 学習指導案の検討 | | |
| 6/11 | 火 | 学習指導案の検討 | | |
| 6/24 | 月 | 学習指導案(英語版)の検討 | | |
| 7/ 1 | 月 | 学習指導案(英語版)の検討 | | |
| 7/ 6 | 土 | 第 9 回学校間交流国際フォーラム | | |
| 7/ 7 | 日 | ワークショップ：学習指導案および教材・教具の検討 | | |
| 7/22 | 月 | 保険説明（学習指導案の検討，指導案の提出について） | | |
| 7/23 | 火 | 保険説明（学習指導案の検討，指導案の提出について） | | |
| 8/26 | 月 | 準備状況確認，報告書・教材集・発表会について，渡航準備・関係書類提出 | | |
| 9/ 9 | 月 | 最終事前打ち合わせ（準備状況，準備物・集合時刻等の確認） | | |
| 9/14 | 土 | 広島―成田 0755-0935 (NH-3236)<br>成田―ワシントン　ダラス 1105-1040 (NH-2)<br>ワシントン　ダラス―ローリー 1220-1329　(UA-4880)<br>空港 ー（ウォーレン先生・ECU バス）→City Hotel & Bistro | | アメリカ・ノースカロライナ州<br>City Hotel & Bistro<br>203 W. Greenville Blvd, Greenville, NC 27834<br>TEL(877)2712616<br>Greenville |
| 9/15 | 日 | （ウォーレン先生・バス） | ミーティング，ホテルにて教材作り<br>各学校の先生方と事前打ち合わせ<br>レセプションパーティ | Greenville　同上 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 9/16 | 月 | City Hotel → Elmhurst E.S<br>（ウォーレン先生・バス） | 学校訪問（Elmhurst E. S）<br>校内見学，授業見学<br>担任の先生と授業についての打ち合わせ | Greenville 同上 |
| 9/17 | 火 | City Hotel → Elmhurst E.S<br>（ウォーレン先生・バス） | 学校訪問（Elmhurst E. S）<br>授業実践 | Greenville 同上 |
| 9/18 | 水 | City Hotel → ECU<br>（ウォーレン先生・ECU バス）<br><br>ECU → ローリー<br>（ECU バス） | 午前 ECU の講義に参加<br><br>午後 ローリーへ移動<br>歴史博物館，自然博物館を見学する。 | ノースカロライナ州<br>Clarion Hotel<br>State Capital<br>320 Hillsborough Street Raleigh, NC 27603<br>TEL(919)8320501<br>Raleigh |
| 9/19 | 木 | 徒歩で，Exploris M.S.へ | 学校訪問(Exploris M.S.)<br>午後 ローリー市内見学<br>自然博物館, キッズミュージアムを見学する。 | Raleigh（同上） |
| 9/20 | 金 | ローリー—ワシントン ダラス<br>1021-1134<br>(UA-4887)<br>（空港－ホテル間はタクシー） | ワシントンへ移動<br>アメリカ文化体験 | Washington Plaza<br>10 Thomas Circle, Northwest, Washington,DC 20005-4176<br>TEL (202)8421300<br>Washington, DC |
| 9/21 | 土 | 徒歩 | アメリカ文化体験・Book Fair<br>ホロコースト記念博物館, ナショナルギャラリー，国立航空宇宙博物館, リンカーン記念館を見学する。 | Washington DC(同上) |
| 9/22<br>9/23 | 日<br>月 | ワシントンダラス—成田 1220-1525 (NH-1)<br>成田—広島 1740-1915 (NH-3237) | | |

## 3 実地研究授業

### 3.1 単元名 第4学年 異文化理解「Let's study kanji !」

### 3.2 事前準備

① 単元設定の理由

私が，「文字」とりわけ「漢字」を取り上げた理由は2つ存在する。

1つは，文字は国・地域の歴史や文化を映し出していることである。漢字の歴史や象形文字の成り立ち，魚偏の漢字が多い理由などに着目させることで，日本の歴史や文化に目を向けることができると考えた。

2つは，子どもたちが本単元を通して「文字を通して文化・歴史が見える」という見方を獲得することで他の文字(言語)に目を向けるきっかけになると考えたからである。

② 準備したこと

授業準備として以下の 3 つを行った。

第一は，教材研究の深化である。自分自身，漢字を通して見える歴史や文化が何なのか，明確に見えていなかったので，漢字に関する書籍を読み理解を深めた。

第二は，日本の子どもたちに「お気に入りの漢字」を書いてもらったことである。こちらから，アメリカの子どもたちに漢字を紹介するだけでは知識教授の一方通行の授業となってしまう。導入段階で日本の子どもたちからのメッセージという形でアメリカの子どもたちに「お気に入りの漢字」を紹介することで，アメリカの子どもたちが漢字に興味を持ちやすいようにした。「お気に入りの漢字」は東広島市の公立小学校にお願いし，第 4 学年の子どもたちにワークシートに記入してもらった。日本の子どもたちに記入してもらった「お気に入りの漢字」は 2 枚ずつ画用紙に貼り，“KANJI BOOK”としてアメリカの子どもたちへのプレゼントとした。

第三は，視覚教材の準備である。文字を授業で扱う私自身が，英語という言語を苦手としており，話し言葉によるコミュニケーションには限界がある。本来なら，パワーポイントによって授業の流れを固定化するのは好ましくないが，視覚的に授業内容を説明することの有用性を考え，授業の流れに沿ったパワーポイントを作成した。また，授業の中心教材となる漢字の成り立ちについてはカードを作成し，一時間を通して子どもたちに見えるようにした。

### 3.3 学習指導案

Lesson Title：Let’s study kanji

Lesson Author：Shuji Kikkawa

Date： September 17th, 2013

Grade Level：4th grade

Subject ： Culture

Description ：In this class, students will learn the origin of kanji and create kanji. Kanji contains Japanese cultures and Japanese histories. They will notice that languages contain cultures and histories.

Objectives：As a result of this activity, it will be possible for children to

1 Learn the origin of kanji and know Japanese cultures and Japanese histories.

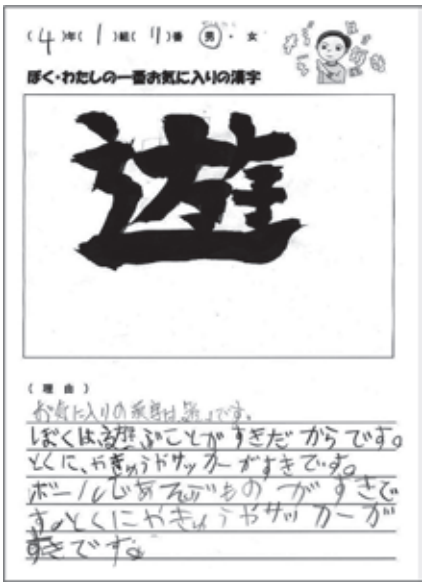
2 Find out each student’s image about friends.

Teaching process：

| Activity | Instruction of teacher | Materials |
|---|---|---|
| 1 Look at kanji and messages from Japanese students. | 1 Show work sheets. And introduce some kanji that Japanese students like. | Work sheets written by Japanese students |
| 2 Enjoy Kanji quizzes. | 2 Ask some questions.<br>-Ask how many kanji Japanese elementary school students learn.<br>[Show some pictures.]<br>-Ask why kanji called Chinese character.<br>[Show a map.] | Presentation data [power point] |

| | | |
|---|---|---|
| | –Show some kanji contain a part means fish. And ask why a lot of kanji contain a part means fish. | |
| 3 Imagine kanji from the picture. And imagine the origin of kanji. | 3 Explain the origin of kanji.<br>Ask what kanji they can image from the picture.<br>Ask what the origin of the kanji is. | Some kanji cards |
| 4 Imagine a form of friends. And create a kanji means friends. | 4 Ask what image they have about friends. And let them create a kanji. | A work sheet<br>Pens |
| 5 Share works. | 5 Show 友[this means friends]. And find good points about their works. | |

### 3.4　授業の実際




(1) はじめに自己紹介を行った。ホワイトボードに「吉川修史」「きっかわしゅうじ」「キッカワシュウジ」と書き、「私には名前が 3 つあります。」などジャパニーズジョークを交えながら，日本語には 3 つの文字があることを紹介した。その後，日本の子どもたちからのメッセージとして「お気に入りの漢字」を紹介した。「海」「家」「笑」「遊」の 4 つについて文字の意味と，選んだ理由について説明した。「遊」について紹介した際には，「君たちは友達とどんな遊びをするの？」と問いかけ，「フットボール」「ベースボール」などのようにやり取りをしながら進めた。

(2) 漢字を通して日本の歴史や文化，日本の小学校生活の一端を見ることができるように以下の 3 つのクイズを提示した。

①「日本の小学生はいくつの漢字を学習するでしょうか？」という問題は，4 択という形にし，全員が問題に参加することができるようにした。

②「なぜ，漢字はチャイニーズキャラクターと呼ばれているの？」という問いは東アジアの地図を提示し，漢字は中国から伝えられた文字であることを捉えることができるようにした。

③魚偏の国字をパワーポイントに示し，「何か気づくことは？」や「共通している部分はないかな？」と問いかけたが，子どもたちは共通部分としての魚偏に気づくことはできなかったため，こちらからすべての漢字に“魚”が含まれていることや象形文字である“魚”の成り立ちについて説明した。そして「なぜ，日本には魚を意味する部分を含んだ漢字が多くあるのだろうか？」と問いかけた。スーパーの鮮魚コーナーや寿司，マグロ漁の写真を提示しながら，日本は海に囲まれており人々は海と共に生きてきたということを確認した。

(3) 象形文字である“山”の成り立ちについて解説した後，“口”を描いた絵から漢字を想像する活動や“雨”という漢字からもとになった形をイメージする活動を行った。“口”の絵をもとにして子どもたちが考えた複数のユニークな漢字が提案された。

(4)「友達とどんなことをして遊ぶか？」や「君たちの友達が好きなスポーツって何？」などと質問し，自分にとっての友達を想い描いてもらった後に友達について絵を描いてもらった。そして，その絵をもとにしてオリジナルの漢字を創造してもらった。

(5) 3 人の子どもに前に出てきてもらい，自分が創造したオリジナル漢字を紹介してもらった。そして「友」という漢字に込められた意味について説明した。

最後に，「世界にはたくさんの文字があります。漢字だけでなく多くの文字は歴史や文化を含んでいます。他の文字を知ることはあなたたちに多くのものを与えてくれます。私は，将来あなたたちが様々な文字を知ることを願っています。」と伝え授業を終えた。

### 3.5 考察

本授業の成果は 3 つ挙げられる。

第一は，「創造」的な活動を取り入れたことである。本授業では，漢字の成り立ちを「知る」に止まるのではなく，それを踏まえてオリジナルの漢字を「創造」する展開にした。異文化を受動的に理解するだけでなく，異文化を能動的に体験し，深めることができたと考えられる。

第二は，文化伝達でなく文化交流となった点である。漢字の成り立ちや漢字の歴史的背景を伝えるだけでは，知識の一方的な伝達になってしまう。本授業では日本の子どもたちからのメッセージとして「お気に入りの漢字」を受け取る場面を取り入れたり，「お気に入りの漢字」を貼り付けた KANJI BOOK を一人一人にプレゼントした。ただ、記号としての漢字を学ぶのではなく，日本の子どもたちとの交流を通して漢字を捉えることができるように授業を構成したことの意義は大きかった。

第三は，子どもたちが他の国･地域の歴史や文化を知ろうと思うきっかけとなった点である。本授業で扱ったのは，日本語における漢字であり，その中でも象形文字である。しかし，私が目指したのは象形文字の理解に止まるものではない。将来，子どもたちが本授業で学んだ見方・考え方をもとに様々な文字に触れ，文化・歴史を知ろうと思った時に本授業の本当の意義が生まれるのかもしれない。

また，本授業の課題は 3 つ挙げられる。

第一は，漢字を通して歴史や文化が見える授業になっていたか，という点である。クイズを通して漢字と日本文化・歴史との関係を捉えることができるように構成したが，子どもたちの中で漢字と日本文化・歴史が結びついたかは不明瞭である。

第二は，発問の不明確さにより教師の意図する活動にならなかった点である。オリジナル漢字を創造する活動では個々が想い描く友達像を描いてもらうことを意図していた。しかし，実際に活動を行うと多くの子どもが友達の全身像を描いたのである。私としては，“握り合った自分と友達の手”や“いつも遊んでいるボール”，“ハート”など様々な形が出てくることを想定していた。「友達のイメージを描く」というニュアンスを英語で上手く伝えることができず，結局は「友達を描く」になってしまった。子どもたちの自由な発想を喚起する手立てが必要であった。

第三は，授業の目標と学習活動が乖離していたことである。これは課題の一つ目とも関連するが，授業の到達点がオリジナル漢字の創造なのか，漢字を通した日本文化・歴史の理解なのか曖昧なものとなってしまった。授業で扱う内容をどちらかに絞った方が学習に深まりが出たのかもしれない。あれもこれもという教材過多の状態になっていたと考えられる。

## 4　体験型教育実地研究における自己変容

### 4.1　教育観の変容

今回のアメリカ訪問を通して私の教育観が大きく変容したかどうかと問えば，自分でも分からない。私が「教育とは？」「子どもを捉えるとは？」「授業とは？」という問いに向き合う上で大切にしているのが長岡文雄氏の「子どもをさぐる」という言葉である。長岡氏の著書を読んで以降，私はこの言葉の持つ意味を考え続けている。今回，アメリカ訪問を通してこの「子どもをさぐる」という考えが揺らぐことは無かった。むしろ，「子どもをさぐる」という言葉は，目の前にいる「この子」に正対して捉えようとするという意味において，万国共通の考えではないかと感じた。

### 4.2　自分自身についての変容

私は，学部１回生の時にある先生がおっしゃられた言葉を心に置きながら今まで歩んできた。それは、人間としての底面を広げろというものであった。砂山は底面が広ければ広いほど大きな山となる。その先生は，これを人間に当てはめて説明されたのである。若い間に様々なことに挑戦し，体験するなかで人間としての底面を広げておくと将来，その上にたくさんの砂をのせることができる。しかし，底面が狭ければ少しの砂しかのせることができない。

今回のアメリカ訪問を通して自分自身の底面を少しは広げることができた。これから広げていく部分，そして積み上げていく部分を発見できたことは大きな意義があった。

### 4.3　グローバルマインドに関する変容

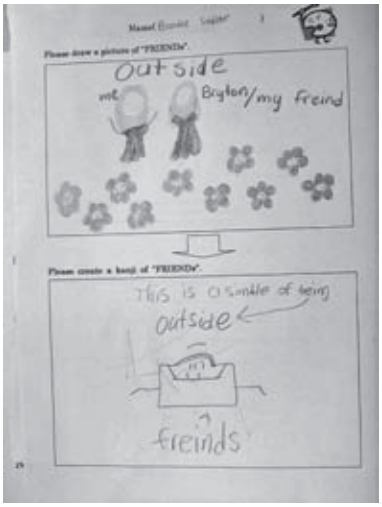
私は，アメリカ訪問を通して国際理解を考える上で次の２点が大切であると感じた。

第一は，「人が見える」ということである。いくら異文化理解や異文化交流を声高に叫んでも、そこに「生きる人」が見えなければ子どもたちの内面に響くものとはならない。私の授業で言えば，日本の小学生からのメッセージやプレゼントとして「お気に入りの漢字」が届いたという点に意味があったと考えられる。

第二は，コミュニケーションを深化させるのは「言葉」であるという点である。これまで英語に対して苦手意識があったこともあり，「英語なんていらない。」「ボディランゲージで十分だ。」などと少なからず考えていたが，今回の訪問を通して「言葉」の持つ力を実感させられた。自分自身に問いが生じても，言葉が通じないと聞くことができない。私が授業の最後に子どもたちに伝えたことは，自分自身も考えていかなければならないと感じた。

## 5 おわりに

今回の体験型海外教育実地研究では小原先生をはじめ GPSC に関わっておられる多くの先生方に長期間ご指導していただいた。また，訪問先のアメリカではウォーレン先生をはじめ多くの人が温かく私たちを迎え入れ，サポートしてくださった。実り多い貴重な体験となったことを心から感謝いたします。ありがとうございました。




### 引用・参考文献

長岡文雄『子どもをとらえる構え』黎明書房，1986 年.